

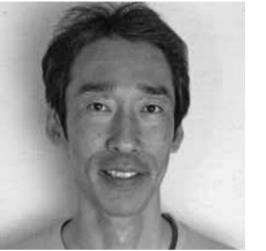


山村に廃園が広がる。

# 特集 食の危機は弱者を襲う

## フェアトレード・21世紀のモラル・エコノミー?

市橋秀夫 / いちはし・ひでお  
埼玉大学教養学部准教授、APLA評議員



### 戦

前の大恐慌にも似た経済の大嵐が吹き荒れる中、経済活動におけるモラル(倫理)の意味に注目が集まっている。「自由な」経済行動こそが社会の活力を生むとして加速度的に規制緩和を進めてグローバル資本主義体制を推進した新保守主義政府の政治家や、そうした経済環境の中で錬金術に狂奔した投資家たち、その錬金術に魅せられてリスク投資に走った大学経営者から富裕市民層にいたるまで、それぞれにモラルの問題があらためて問われている。その歪みは金融の世界に留まらず、生命の基盤たる食の世界でも、偽装や偽造による利益確保というかたちで顕在化した。

ヨーロッパでの核廃絶運動のリーダーでもあった歴史家E・P・トムスンが、1960年代に「モラル・エコノミー」ということを言い出した。18世紀イングランド民衆の食糧暴動をとりあげ、共同体内の支配者と被支配者との慣習的な義務や権利の遵守を訴えた合理的な抗議行動であったことを明らかにしたのである。地主などの支配層には民衆を食べさせる義務

があり、民衆はそれに訴えて生きさせると要求したわけである。無原則な暴力行為に発展するような事態もあつたが、暴徒たちは、悪徳業者の倉庫などから奪った小麦を民衆価格と呼ばれる価格で販売し、その売上げを業者に返金したりもした。多くの暴動行動には保守的ではあるが伝統的な民衆的会社規範にもとづいた自己規制が伴っていたのである。そして、トムスンは、民衆のそうした「モラル・エコノミー」という規範意識を侵食し、凌駕していった産業革命期以降の支配的な経済規範を「ポリティカル・エコノミー」と呼んだ。自由主義市場経済の価値規範である。

フェアトレードを一種の「モラル・エコノミー」回復の運動だとする見方もできる。しかし、1980年代後半以降のグローバルな新自由主義経済体制の確立という背景の中でフェアトレードが市民権を確立してきた経緯をふまえると、行き過ぎた市場主義の蔓延こそが「モラル・エコノミー」を呼び出したというパラドックスが成り立つように思われる。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

### CONTENTS ■ HALINA 03 2009.02.01

02	Relay Essay ポコポコ③ フェアトレード・21世紀のモラル・エコノミー? ©市橋秀夫
03	<b>特集</b> 食の危機は弱者を襲う 貧困の連鎖の中の食 ©大野和興 Report from the Philippines 政府の無政策と貧困層の間で広がる食の危機 ©G・ラシガン Report from Indonesia インドネシアの「食の安全」—庶民には賢い選択? ©W・E・ウィジャヤンティ
08	Topics 「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議報告—南と北の新たな連帯 ©秋山真兄 ゆたかな暮らしをささえる、せかいのますしさをかんがえる—JFSA(日本ファイバーリサイクル連帯協議会)の活動とは ©西村光夫
10	堀田正彦のアジア食い倒れ③ ニューテリーYMCAクラブの朝食 ©堀田正彦
10	むらさきを歩く③ 星の谷ファームの里から ©大野和興
11	あっちこち雑学手帖③ 一度あることは三度ある? ©松田麻衣子
11	じゃらん・じゃらんアジア③ オウムのいる風景 ©村井吉敬
12	撮っておきアジア③ タイ、ムクダハン県ニコムカムソイ郡 ©下田寛典
13	APLA生活③ 東ティモール産コーヒー産地を視察してきました。 ©田原幸子
14	Voice from APLA partners 【ネグロスより】「危機でもこわくない!」2つの農民集会在意味するもの 【インドネシアより】ラピンド熱泥問題の今
15	事務局便り

### 表紙のことば

このパティック(インドネシア製)は、ジャワ舞踊の練習着としてジャカルタのとある骨董屋で購入したカイン・パンジャンである。カインは「布」、パンジャンは「長い」という意味で1枚の長い布を腰に巻きつけて着用する巻型腰布のことである。ジャワ舞踊は、ガムランの響きに合わせて舞うインドネシア・ジャワ島の宮廷舞踊で、はなやかでにぎやかなバリ舞踊とは対照的に抑制された「静」の動きを特徴としている。それはまるで京舞のような凛とした優雅さを感じさせる舞である。着用するパティックはもともと王宮内における手工芸として発達し模様も身分や階級に応じ使い分けられた。動く瞑想といって良いほど大変ゆったりとしたジャワ舞踊と一体化したパティックの美しさの魔法は、未だに解かれることなく私の中に生き続けている。(特非) WE21ジャパン相模原 WEショップ相模原若松店マネージャー 稲葉博子

## 貧困の連鎖の中の食

大野和興 / おおの・かずお  
ジャーナリスト、本誌編集長

### 広がり増殖する貧困

おコメつくってもメシ食えない / 乳搾ってもメシ食えない / お魚獲ってもメシ食えない / 包丁研いでもメシ食えない / 牛丼盛ってもメシ食えない / 笑顔つくってもメシ食えない / 食えないどうしが集まろう! 食えないどうしがつながろう!

10月19日に都内明治公園で開かれた「反貧困世直しイッキ」集會に、三里塚の若手農民や都会の貧民青年たちと語らって、「食の危

食料危機騒ぎがうそだったかのように、世界の穀物価格はいま沈静化している(4頁図参照)。だが、食の危機は目に見えない形で私たちの世界をいまも蝕みつつある。地球規模の市場競争のもとで世界中に貧困が広がり、生命の再生産の基礎である食を扱う人びと、農民や食関係の労働者をも襲う。自身の生存権さえまならない生産現場から、安心して食べられる豊富な食が生まれるはずがない。こうして食の危機と貧困が重なり合い、連鎖し、世界中の弱者を襲う。私たちはこの食をめぐる負の連鎖をどこで断ち切ることができるのか。

機々食わせろ! という分科会を引っさげて参加した。ピラに科会の趣旨を書かなければならないというこ

とでひねりだしたものだ。あらゆるものを市場という土俵に持ち込み、そこで競わせるシステムが地球全体を覆っている。グローバルゼーションとよばれるこの仕組みは、たくさんさんの涙と汗と絶望と憎悪を世界に生み出した。競争に勝つためにできるだけ安上がりな競争に勝つために、労働力の使い捨てが当たり前になった。本来商品化してはいけないはずの自然までもが儲けの対象として市場経済に組み込まれ、環境破壊が進んだ。福祉や教育、医療など人びとの生命を支える公共サービス部門

農産物の自由貿易反対を訴える韓国農民デモ。(2006年、WTO香港閣僚会議開催に合わせて)



農と食の現場の貧困の後ろには、さらに大きな貧困の海がある。いま世界を覆う金融恐慌は、その海をさらに拡大する。それは市場の急速に縮小となって農業・食料分野を襲う。11月13日付の読売新聞は博報堂生活

職員の比率がきわめて高く、かつ低賃金・長時間労働が横行している。マクドナルド、牛丼チェーンのすき家、安売り食品コンビニSHOP99など、名ばかり店長が横行し、残業代不払いで労働者に裁判で訴えられた企業が多い業界なのだ。すき家を労度基準法違反で刑事告発したアルバイト店長は「月400時間近く働いて手取りは10万円を超えなかった」と話している。とっくに過労死水準を越えている労働時間である。

しかしいくら搾取しても国内では限界がある。そこで企業は中国へ出かけ、農民と労働者を買叩く。あの農業ギョーザが出た冷凍食品会社は、日本企業からの「安く安く」という要求に沿って、農村からの出稼ぎ労働者、いわゆる農民工を使い捨てていた典型的な企業だった。生存権さえ奪われているこうした労働現場から、安心して食べられる食べ物が生まれるはずがない。いま横行している汚染食品の背後にあるのは、貧困と

食の危機もグローバル化

という世界を覆う構造問題なのである。

自由貿易反対を訴えるデモ。(2006年、WTO香港閣僚会議開催に合わせて)



もとにある。農業ギョーザは日本発のブーメラン 08年早々、中国から輸入された冷凍ギョーザから高濃度の殺虫剤が検出され、大騒ぎになった。その直後、インターネット新聞の日本ペリタに、真の要因は国内にあるという文章を書いた。日本の食品資本は安い食品を作るために自由貿易を進めて、原材料価格を農民から買い叩き、さらには食品を扱う労働者を低賃金と過重労働で搾りつくしてきた。いま日本では食うや食わずの若者、シングルマザー、職を追われた中高年者、住まいからも排除されたネットカフェ難民や野宿者、こうした人びとが日々増殖している。この貧困にもっともさらされているのが農と食、介護・福祉の労働現場であ

シカゴ商品取引所小麦・トウモロコシ・大豆先物相場の推移



2008年は先物取引での穀物の価格変動が激しく、食料危機の引き金となった。また、この食料危機は貧しい人びとに大きな影響を与えた。

\*ブッシュェル=ヤード・ポンド法における体積の単位で、穀物の計量に用いられる。1ブッシュェル=8ガロン。(1ガロン:35~45リットルの範囲内)

る。共通しているのは、いずれもひとの生命を扱う場だということだ。農の現場では、この10年で生産者手取り米価が半分になり、農地価格も急落している。国際競争に生き残ろうと規模拡大し、そのためについた負債の返済はおろ

か、借地料や水利費まで滞納する大規模農家が東北のコメ地帯で広がっている。農村の貧困化は、そのまま都市の食の労働現場に連なる。スーパー、コンビニ、弁当屋、ファーストフード、ファミレス、焼肉チェーンなど食の現場は、多くの業界の中でも非正規

総合研究所が行った最新の調査を紹介、「今後節約したいもの」と言う質問に対し、「ふだんの食事にかけるお金」と答えた人が44%で、10年前の98年に比べ14ポイントも上がっていた、と報じている。安くはないと売れないと、食品企業はいっそうのコスト低減を求めると。それは、原材料である農産物の買い叩きと、それを扱う労働者の人員縮小・賃金切り下げ・過重労働の押し付けと言う形で、農民と労働者に押し付けられる。08年初めに大騒ぎとなった中国

の農業入りギョーザも、世界中の問題になったメラミン入り牛乳も、こうした貧困の強制と連鎖が生み出したものに他ならない。それをブーメランという言葉で表現した。こうして作られた中国の安い食品を世界でもっとも受け入れているには最貧国のもっとも貧しい人びとである。こうして貧困のグローバル化が危ない食品のグローバル化を生み、弱者を襲う。この連鎖に立ち向かう道はひとつ、食えない道すがすがり、たたかひの連鎖を作り出す以外にない。■

Report from the Philippines [フィリピン]

政府の無政策と貧困層の間で広がる食の危機

ゴリオ・ラシガン / Gorio Jr. M Las-igan / CORDEV (農村発展のための協同組合) 委員長

消費者の間に動揺を引き起こしている。この主たる原因は企業の拝金主義、輸入自由化、そして国内生産物の保護や食の安全確保に関する有効な政策を政府が打ち立てられていないことに起因する。政府機関は、明確なガイドラインが示されていないと拒否をするオーナーたちを尻目に、スーパーマーケットの棚から中国製製品を強制的に回収した。

今年の米騒動

このメラミン騒動以上に、米不

私はオルター・トレード・ジャパン(ATOJ)の現地法人オルター・トレード・インドネシア社(ATINA)で働きながら、3歳になる男の子を育てている母親だ。ATINAはエコシュリンプの名前で知られる粗放養殖エビを製造し日本の生協組合員の方々に届けている。このエコシュリンプのモットーのひとつに「安心して食べられるエビ」ということがある。エコシュリンプは池での養殖過程から工場冷凍製造され輸出されるまで、すべてのプロセスが透明であるため、私は自信を持って日本のお母さんやお子さんに、「エ

コシュリンプは安全な食品です」とお薦めすることができます。だが、ここで私が住むインドネシアの食をとりまく状況を考えたとき、エコシュリンプのように安全な食品があるだろうか、と複雑な思いにかられてしまう。

インドネシアの小学校の校庭には、子ども相手に駄菓子や軽食を売る屋台が出る。ここで売られているのはどぎつい色つきのスナックや添加物いっぱいソーセージ。安いけれど安全ではない食べ物だ。先日テレビで着色料を使っただ食品の問題が取り上げられ、この中でシロップ(甘いジュース)を売る屋台の商人が、繊維用の着色料を使用していることを認めていた。繊維用着色料は食品用のものより安いのがその理由だ。こういう危険な食品を子どもたちに売る商人に腹が立つが、屋台をひく人びとの多くが一日3万ルピア(約3000円)を稼ぎ出すのがやつとのぎりぎりの生活をしている人たちである。そのことを思うと、彼らを単に非難することもできない。

もうひとつ、最近インドネシアで起きた大きな食品問題は、メラミンが混入した乳製品や菓子類がインドネシアの市場にも多く出回っていることだ。この事件は粉ミルクを与えている母親をパニックに陥れた。私の子どもはまだ粉ミルクを飲んでいない。一時はもう粉ミルクを与えるのを止めようかとも思ったが、ミルクを欲しがって泣き叫ぶ子どもを説き伏せるのは無理だと観念した。

食品の安全を考えるとき、まずは食に関する正しい情報を消費者にきちんと開示するような法律が必要だと考える。そして、私たち消費者ができることは、有害添加物を含んだジャンクフードを食べない、食べさせない、という運動を起すことだ。そして何よりも大切なのは、素性の分かった素材で作った手作りの食べ物を子どもたちに与えるということだ。有害な添加物が入った食品を常日頃摂取することが人体にとって、特に

### Report from Indonesia [インドネシア]

## インドネシアの「食の安全」庶民には贅沢な選択?

ウィウィック・エリ・ウィジャヤンティ

Wiwik Erly Wijayanti  
オルター・トレード・インドネシア社(ATINA)社員

コシュリンプは安全な食品です」とお薦めすることができます。だが、ここで私が住むインドネシアの食をとりまく状況を考えたとき、エコシュリンプのように安全な食品があるだろうか、と複雑な思いにかられてしまう。

食品の安全を考えるとき、まずは食に関する正しい情報を消費者にきちんと開示するような法律が必要だと考える。そして、私たち消費者ができることは、有害添加物を含んだジャンクフードを食べない、食べさせない、という運動を起すことだ。そして何よりも大切なのは、素性の分かった素材で作った手作りの食べ物を子どもたちに与えるということだ。有害な添加物が入った食品を常日頃摂取することが人体にとって、特に



学校近くの屋台。

発育盛りの子どもたちにとってどれほど悪影響を及ぼしているかということを考えると胸が痛くなる。しかし、現実のインドネシアでは食の安全を心配する前に、どうしたら今日の食事にありつけるかを心配しなければならぬ貧困層がまだまだたくさんいる。添加物の有無をじっくり吟味しながら食品を選ぶことができるのは、ほんの一握りの恵まれた人たち、多くの人びとにとって安全を求めるのは贅沢で、少しでも安い食品を日々探し求めているのだ。(訳:インドネシア・東テモール担当デスク津留麻子)

### 浅はかな政府

野党は、メラミン騒動や米不足へのアロヨ政権の対応策が浅見なもので、貧しい人びとの健康をおざなりにし、現在フィリピンが直面している深刻な状況を継続させるものだと批判している。政府は乳製品の回収や米の貯蔵

### ゆがんだ食文化

他の第三世界の国同様、フィリピンにも、経済自由化によって在庫余剰となった安い製品が、安全性の確認がされていないまま大量

### やるべきことは「オルタナティブ」

これら一連の食の問題はある疑問を浮き彫りにした。「なぜフィリピンはそもそも食料の自給を実現できていないのか?」

### あるべき姿と現実

食品の安全を考えるとき、まずは食に関する正しい情報を消費者にきちんと開示するような法律が必要だと考える。そして、私たち消費者ができることは、有害添加物を含んだジャンクフードを食べない、食べさせない、という運動を起すことだ。そして何よりも大切なのは、素性の分かった素材で作った手作りの食べ物を子どもたちに与えるということだ。有害な添加物が入った食品を常日頃摂取することが人体にとって、特に



来シーズン収穫のお米は充分足りよう懇願している農民。

に流れ込んできている。北部ルソンの村では、季節ごとに多種多様な農畜産物を生産している。子どもたちはビタミンたっぷりのグアバやアボカドを近所の木から自由にもいで新鮮なうちに食べることが出来る。しかし、中国から非常に安い価格で輸入され大々的に宣伝される、ぶどうや梨、りんごを買うよう親にせがむ。輸入されて

物質を含有するような食料品を輸入せざるを得ない。すでに他国では禁止されている危険物質を規制する試みは、巨大企業とその母国の激しい抵抗に合う。農業、人工甘味料、添加物、遺伝子組み換え作物(GMO)、そして現在はメラミンなどを含んだ食品が輸入され続けている。

# 「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議報告

南と北の新たな連帯

秋山真児／あきやま・なおえ  
APLA共同代表

2 008年11月8日〜9日、福岡で「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備のための「アジア民衆福岡寄り合い」が開催された。

「基金」設立呼びかけ団体であるAPLA、ATJ、グリーンコープ・生活クラブ・パルシステムの各生協、大活クラブ、日本消費者連盟、韓国で民衆交易を進めているドゥレ生協と共に、海外ゲストとしてAPLAのパートナーでもあるフィリピン（ネグロス島と北部ルソン）、インドネシア、東ティモール各組織、そしてATJのオリブオイルを生産するパレスチナのNGO、それに加えてインドネシア・パプア自治州のNGO、パキスタンの貧しい子どもたちのための私学を運営している組織などが参加した。

## 民衆基金の目的

寄り合い1日目は、参加各組織から現状と問題点・課題についての報告から始まり、なかでもパレスチナにおけるイスラエルによる土地略奪、農地破

壊、人権侵害について、参加者はあらためてその深刻さを認識する機会となった。

2日目は、前日の各国の報告を基盤にして「基金」設立について話し合われ、以下の基本的な認識と活動目的が確認された。

◆アメリカから始まった金融破綻は世界を大恐慌に巻き込み、しかも、最も苦しむのは南の国々の民衆と北の国々の貧しい者である。この危機的事態を乗り越えるには、南の民衆と北の市民の連帯にしかない。南の民衆と北の市民の連帯としての民衆交易網を築きあつてきたこの20年余りの経験を基盤に、より広範に、緊密に、深いものへと進めなくてはならない。

◆この連帯は「南と北の共生」を目指す、それは「南」が「北」と同じになることではなく、「南」自身を再発見して自立していく。そして「北」は、南が南として自立することを支援し、その結果として「北」

もこれまでとは異なるものになることである。

◆今までの連帯は日本・韓国と他の国との2国間どうしの線の関係でしかなかったが、各国どうしが関係を持つ網の目の連帯に発展させなくてはならない。

◆これらのことを実現するために、農業を核とする第1次産業を育み、民衆交易事業の総合的な成長・発展を実現していくための互恵的な金融事業を構築することが必要である。

## 基金設立に向けて

この目的の具体化についても活発な意見交換がなされた。その主なものは次の通り。

- ①各国とも「農業による自助・自立の達成」が緊急の課題である。特に農地の獲得や農地を取り返すことが、日韓も含めて重要な共通課題である。
- ②生産者を守り、食料を確保するため自給率を高め、安全な食料を確保し、生態系を大切にするために、産直事業、民衆交易による地域経済・民衆経済の強化・発展が求められる。
- ③自助・自立の達成には、女性が主体になることが不可欠であるとともに、青少年の教育の場の確保とその維持

# ゆたかなくらしをささぐえる、せかいのまぜしさをかんがえる

JFSA(日本ファイバーリサイクル連帯協議会)の活動とは  
西村光夫／にしむら・みつお  
JFSA事務局海外事業担当

## 古着を通じた貧しき人びととの協力

JFSAは貧困により教育を受けられない子どもたちのために、パキスタンの大都市カラチ市のスラムに作られた学校(アルカイールアカデミー)と協力して、寄付金に頼らない自立した学校運営を行うため、古着を活用した連帯事業を1995年から続けている。私たちの生活から「リサイクル」される古着の

行き先に暮らす人びとと協力関係を持ち、双方の立場から地球的な規模で資源の流れを考え、お互いに支え合う豊かな社会を作ることが大切だと考えるからだ。

パキスタンへは、年間5000トン以上もの日本の中古衣料が故繊維業者によってビジネスとして送り出され、その他、韓国・ヨーロッパ・アメリカな



古着の卸問屋街(カラチ市ハジケンバ地区)で働く人びととその家族(真ん中が西村さん)。アフガニスタン国境に沿ったワジリスタン地域から出稼ぎに来た人びと。彼らの故郷は今、毎日のようにアメリカの空爆を受けている。タリバーンと呼ばれている人びとは彼らであり、彼らの同胞なのだ。ここで働く少年たちの中には、同胞を殺された憎しみに押されて、日本やアメリカが「テロとの戦い」と称している戦線に加わる者もいる。この写真は3年ほど前に撮ったものだが、これを見るたびに、共に古着の選別を行なった少年たちのあどけなさ、この憎しみの連鎖に無力な自分の情けなさに泣けてくる。

どの豊かな国々からも数十万トンの古着を輸出している。貧困層が多いパキスタンでは古着の需要が高く、全国のいたるところに古着のパザールがある。また古着は国境を越えてアフガニスタン・イラン・中央アジア諸国へと売られていく。しかし、古着の価格は貧困層にとって安いものではなく、大規模な輸入元は莫大な利益を上げ、大邸宅に住んでいる。

## 非営利の市民活動としての自立

スラムの子どもの自立を目指すとした教育支援活動は、長い時をかけて実を結ぶものだ。従って、それを支援する日本側の活動も継続していくことが必要となる。古着の一部は、JFSAの古着ショップやフリーマーケットなどで国

も重要な課題である。

④市民・民衆による互恵的な金融事業は、各国の農民を始め民衆にとり経済的社会的状況の改善に有用なものとなるだけではなく、資金提供者となる日韓だけではなく、資金を活用する国々の組織も参加して、民主的に運営する相互扶助の事業である。

⑤また、融資事業とはなり得ない課題も多くあるが、融資ではない資金供与、情報・技術・知恵の分かち合いは、このネットワークの協力関係をういて行うことが可能である。

以上のような協議を経て、

- ◆「互恵のためのアジア民衆基金」を2009年秋に正式に発足させる。
- ◆基金の事業はあくまで「融資」事業とする。
- ◆基金の資金は、各団体が取扱うバナナとエコシュリンプの価格に一定額の寄付金を付加することで造成をはかる。

を合意し、2009年秋の設立総会(韓国を予定)での再会を約束して終了した。APLAは、南の国の関係組織と連携してこの基金の活用を検討すると共に、特に農民どうしの相互交流を軸にして、上記の①③⑤の課題を担って行く役割を果たしていきたい。■

内販売をして、寄付金や助成金に頼らない継続的で自立した市民活動を行っている。パキスタンの貧困層の人びとの自立の歩みに寄り添い、学びながら、世界の貧しさに支えられた豊かさから新たな生き方への自立を作り上げたいと考えている。

## スラムの人びとによる古着販売事業

アルカイールアカデミーは、1987年にカラチ市のスラム地区で10人の子どもたちと一人の先生で始まった。学校の経費は寄付に頼っていたが、自立した運営をするためにJFSAと協力して古着の販売事業を行なうアルカイール事業グループ(AKBG)を作った。

JFSAは日本の国内で古着を役に立てたいと考えている団体(生活協同組合)などや個人に呼びかけて、年間100トンの古着や毛布を回収し、仕分けと選別をする。65トンをパキスタンに輸出し、AKBGがこれを販売して輸入にかかった経費、古着代金などを払い、残りの収益を先生の給料や子どもたちの教材費・給食費など学校の運営費に充てる。その事業収益の増加により教育事業は拡大され、現在、本校・分校・地震被災地の青空学校・専門学校・職業訓練所を合わせた児童数は約2500名に達する。■

## 西村さんの歩みとJFSAの設立経緯

1979年【一人の暴走族の少年との出会い】話のわかる親父と乗せられて、非行少年といわれる少年たちの溜まり場「寺子屋」を作る。

1983年【生活協同組合の人びととの出会い】クソババー集団と嫌っていた組合員のおばさんにベンツに乗れると誘われて「寺子屋」の少年たちとリサイクルセンターを設立する。“きつたねーマネ”して銭は稼がないことを少年たちと約束する。

1986年【第3世界ショップ・ATJと出会う】ツッパリ君たちとフィリピンへ行く。ハワイ観光に行く気分で行ったもののスラムの人の話を聞き、涙を落としていたツッパリ君もいた。

1987年【外国人労働者の人びとと出会う】リサイクルセンターは日本語を学ぶ場となり彼らの労働相談も行なうようになる。ヤクザに拉致されたツッパリ君を助けてくれた外国人労働者もいた。真に民衆間の国際交流が行なわれていた。

1991年【パキスタンで物乞う子どもたちと出会う】パキスタンを初めて訪問する。物乞う子どもたちのために何か出来ないかと、余計なことを考える。

1993年【ファイバーリサイクルネットワーク(神奈川)との出会い】日本の古着がパキスタンに年間7,000トンも輸出されていることを知り、古着を事業素材とした連帯事業的海外支援ができないかと考える。ツッパリ君たちのリサイクルセンターが年商一億円を超える。

1994年【生活協同組合員のNGOグループと故繊維業者との出会い】連帯事業的海外支援を行なうため、ファイバーリサイクルネットワーク千葉・JFSA設立準備会を、リサイクルセンターと生活協同組合員のNGOグループと共同して作る。千葉県内で故繊維業者の協力を得て古着の実験回収を行なう。ポロ屋といわれ差別を受けてきた故繊維業者さんにツッパリ君たちは親しみを感じていた。

1995年【カラチ大学の社会福祉学部教授とスラムの学校との出会い】カラチ大学教授、日本から強制送還された外国人労働者、スラムの学校長などと協力して連帯事業の受け皿となる現地NGOパキスタンファイバーリサイクル連帯協議会(PFSA)を立ち上げる。日本語がペラペラで、日本人の心を読み取ることができ、貧困層の出身でもある彼らの協力なしには立ち上げことは出来なかったと思う。これを受けて、ファイバーリサイクルネットワーク千葉(FRN千葉)とJFSAを設立する。

03

# あつちこつち 雑学手帖 03

松田麻衣子 / まつだ・まいこ  
APLA事務局



新春、太宰府天満宮にて。

実家の近くに菅原道真公が祀られた神社がある。普段でも人でにぎわう場所だが、正月はさらに人であふれ返る。近所の利点だ、人込みにもまれるのを覚悟で三が日に行かずとも1月中に行けば大丈夫とのん気に構えていると、その内梅の季節を迎え、じゃあ梅を見に行くついでになり、次は紅葉、最終的には来年に持ち越し、そして振り出し戻るのがここ数年のオチだった。心を入れ替えて正月よ、もう一度！と願ったところで詮無いことだが、あるところにはあるのだ。カンボジアでは正月が三回ある。

## 一度ある正月は二度ある？

月1日はチャイニーズ・ヘトナム・ニューイヤー。華僑やベトナム系が多い地域では、学校や会社、市場が3日間休みになる。さらにカンボジアの正月、クメール・ニューイヤーがあり、4月13日が大晦日で14日〜16日が三が日となる。家族で集まり新年の挨拶を交わし、飲んで食ってグータラ過ごす。ほこりやゴミを掃きだすと「福が逃げてしまう」ため掃除をしない。インターナショナル・ニューイヤーから三ヶ月半後のカンボジアでは、日本の正月と同じような光景が見られる。

カンボジアに限らず仏教を信仰する東南アジアの各地域では、この期間に「水かけ祭り」というその名の通り誰彼構わず水を掛け合う祭りが盛大に行われる。お坊さんが読経をあげ仏像に水を掛けて清めるといいう儀式が、しばらくすると祭りに変わる。仏様にするようにバケツから水を手で掬ってびしょと掛けるなんて生易しいものではなく、バケツごとひっくり返して水鉄砲まで持ち出すというのだから凄まじい。

1月、旧正月、4月と、主役は違えどいわば国中祝い尽くしのようなカンボジア。そんなに信心深くもないけれど、行けばお裾分けの福くらいはもらえるだろう。

01



# 堀田正彦の アジア食い倒れ 03

堀田正彦 / ほった・まさひこ  
㈱オルター・トレード・ジャパン代表取締役



ニューデリーYMCAクラブの朝食  
すく古い話をしよう。1979年にインドで開かれた「アジア農村演劇会議」に参加した私は、一ヶ月間をなんと「村はずれの村」という名の田舎で毎日カレーを食べて生活するという経験をした。これは、さすがに体に堪える。特に排便が苦痛になる。昨日の唐辛子がいつせいに肛門の粘膜を攻め立てるのである。口はやがて辛さに慣れるのだが、肛門は赤く腫れたまま、なかなか直らない。私は「なぜインドではトイレットペーパーを使わないのか」という真理を身体で理解したのである。私は「水で洗う」と言う偉大な習慣を身に付けることができた。

## ニューデリーYMCAクラブの朝食

コンノート・ブレースに近い「YMCAクラブ」だった。翌朝、よれよれのTシャツと半ズボンにサンダル履きで食堂に入ろうとした私は、白髪の小柄な給仕長に呼び止められた。彼は一言、「ドレス・コード」と言いつて入り口の掲示板を指差した。そこには「Yシャツ、ネクタイ、靴、着用のこと」と明示されていた。私は給仕長からよれよれの備え付けの濃紺のネクタイを借り、部屋に戻って、襟付きのシャツと長ズボンに着替え、靴を履いて出直したのである。

「グッドモーニング サニー」と、先ほどの給仕長が洗い声で挨拶をする。私を窓際のテーブルに恭しく案内してくれた。続いて、パリッとしたナプキンをひざにかけると間髪を入れず、ウェイターが紅茶のポットとミルクを、続いて4枚のカリカリのパンが本立ての本のように載せられたトースト立てが運ばれてくる。そして、バターとマーマレード。一ヶ月のカレー漬けの後のこのパンと紅茶は「美味！」と言うに尽きる。そして最後に運ばれてきたのは、深皿に鎮座する2個の「ポーチトエッグ」だった。塩と胡椒だけでいたただくその淡白な卵は、その後も時々夢に出てくるほどに「滋味」そのものだった。

04

# じゃらん じゃらん アジア 03

村井吉敬 / むらい・よしり  
早稲田大学教授、APLA共同代表

## オウムのいる風景

アンボン島にワアイというきれいな海辺の村がある。地名の珍しさに惹かれて何度か行ったことがある。大ウナギのいる泉は観光地だった。そのすぐ近くで女性たちがイワシのヤシ酢漬けをしていた。そして家の軒先に白いオウムがいた。東インドネシアの島々ではオウムがよく飼われている。みんなオウムのことを「ヤコブ！」と呼んで可愛がっている。ヤコブは平和な島の風景だった。



オウムとおばさん(バプア・ピントゥニ湾オトウェリ村にて)。

アンボン島周辺は1999年から未曾有の血なまぐさい「宗教紛争」に巻き込まれた。キリスト教徒対ムスリムの紛争で、7000人とも1万人ともいわれる犠牲者が出た。ワアイはキリスト教徒の村だったが、村はムスリムの襲撃でほとんど壊滅した。実はこれは宗教紛争といえるようなものでなく地方政治・中央の政治の利害、軍の仕掛け、放置や荷担があったことが次第に明らかになっていくが、知るよしもない住民は襲撃し、襲撃され、ただ犠牲になっただけである。

紛争から7年後、やっとアンボンに行くことができた。ワアイ村に行ってみた。大ウナギの泉はそのままだった。しかし近くの家々はほとんど焼かれ、イワシの酢漬けの風景もなくな、ヤコブもいなくなった。ようやく人びとは村の再建にとりかかっていた。牧師さんに話を聞いた。「燃やされ、殺された。丁字の木まで焼かれた。森に逃げた。23人が死んだ。」

荒俣宏によれば人声をまねるオウムは紀元前四世紀にインドからギリシャに持ち込まれた記録があるという。オウムはよほど古くから人間が「交易品」として移動させた動物のようだ。ペットにされたのだろう。オウムに分類されるのは、野生では21種もあり、大体がオーストラリアかインドネシア東部のみが存在しているという。日本ではどういわけか「オタケサン」と呼ばれていた。「ヤコブ」や「オタケサン」も紛争の受難者である。

02

# むらを歩く ③

大野和興 / おおの・かずお  
農業ジャーナリスト、本誌編集長

## 星の谷ファームの里から

天明伸浩さんと香織さんがこの地で農業を始めて14年目の冬を迎えた。新潟県上越市吉川区川谷地区。谷沿いの道を上流へ上流へとのぼりつめた、最上流にある集落だ。名だたる豪雪地帯である。

ふたりでこの里に移り住んだ1995年は大彗星が地球に接近した年だった。月のない夜、見上げる空は一面の星だった。『星の谷ファーム』という言葉が湧いてきた。集落の背後には尾神岳がそびえる。雪をたっぶりすったブナ林から湧き出す水は、豊かな水流となって田圃を潤してくれる。



山と田畑を背に天明さん一家。(『星の谷ファーム』のWeb siteより《http://www.valley.ne.jp/~valley/》)

空が澄んでいて、水がきれいいて、人がやさしい。ふたりはこの地に住みつき、三人の子どもの親となった。二人とも都会育ち。伸浩さんは東京農工大学院で育種を勉強した。

農場の中心は稲作。農業、化学肥料は使わず除草はカモに任せる。いま子育てに忙しい香織さんは、将来自分が主役となる部門としてブルーベリー作りに取り組んでいる。子どもの成長に合わせて徐々に本数を増やしていくつもりだ。

11月終わり、ブルーベリーの樹は、株の中心に打ち込まれた木に、枝ごと縄でぐるぐる縛り上げられていた。雪による枝折れを防ぐためだ。

雪に埋もれる冬、香織さんはブルーベリーのジャムをつくる。天明さん一家の農のくらしをささえるものがふたつある。ひとつは上越有機農業研究会の仲間。代々百姓から新百姓まで、年齢も作物も異なる人たちが集まって20年がたつ。伸浩さんは現在代表をつとめ、国の農業研究機関である上越研究センターが行う遺伝子組み換え稲栽培実験の反対運動の先頭に立ってきた。

もう一つは地域の人たち。天明さん夫婦を地域に迎えてくれた当時の区長さんは、すぐ近所だが、この1年家に雨戸はしまったままになった。「こうしてみんな老いて行く。自分の役目はここに若い人を呼び込むことかもしれない。」

## 今回のお題

### 東ティモール産コーヒー産地を視察してきました。

レポーター  
田原幸子 / たはら・さちこ  
グリーンコープ生協ふくおか理事長



**朝**、布団から出るのがおっくうになってきました。東ティモール産地視察の時は涼風たつころでした。あれから、秋冬の空気がしっとりとした季節となり、東ティモール・ロロサエコーヒーの苦味が一段と冴え、おいしいと感じています。東ティモール視察後の、私とロロサエコーヒーのかかわりと、お気に入りのお話しをします。

## 人生変えるコーヒーとの出会い

なににせよ、まずは東ティモールを知ってもらわなくてはならない！と思い、視察報告では心揺さぶられた体験談と「ロロサエコーヒーを飲もう!!」を、めいっぱいアピールしました。

我家では、もっぱらドリッパックを愛飲しています。そのワケは、いつでもすぐ手軽に飲めること、マヌサエ村、マヌタシ村でドリッパックコーヒーを淹れて飲んでもらったときの感嘆の声が忘れられないことからです。

そして、友人たちからは「人生を変えてしまうようなコーヒーに出会ったみたいね。」と言われていました。多少の味の好みはありますが、コーヒーに関してはさほどこだわりもないのに、ロロサエコーヒーの味の個性や東ティモールの人たちの暮らし・自然など語る語る…。『人生を変える』は大袈裟だけど、確かに味わいだけでなく、共に生きる人たちの思いながら飲むコーヒーとなっています。

## 民泊の思い出

今でも、時折思い出すのは、マウ

ブ村の民泊です。夜は真っ暗。降りそそぐ星空。私たち歓迎のため開催されたダンスパーティーの朝方まで鳴り響いた音楽。ヤギ・ブタ・ニワトリが闊歩する賑やかな朝…。その中でも私の一番のお気に入り、村の女性たちと、真っ暗な台所でソーマンを茹でたことです。薪を炊いて鍋をかけ、そのまわりに幼子を脇に抱えた4〜5人の女性たちとで囲み、お湯の沸騰を待ちました。薪の灯りが映す瞳は「何ができるの?」「おいしいの?」と問われているよ



←東ティモールの人びとに折り紙を教えている様子。

↓コーヒー生産者と参加者で集合写真。



う。「茹でるだけ簡単でおいしいよ。」と答え、子どもたちをあやしながら「おいしくできますように」を共有しようとした。そして、料理の出来上がりをみんなで待つのは、こんなにワクワクして楽しいんだ、と感じた場面でした。(茹でるだけとはいえ、うまくできるかのドキドキもありました。)

## ろっすくの灯りと共に

真っ暗な中、薪の炎がゆらぎ、不思議な感じでした。火を囲んだ人たちの鼓動が伝わり、ゆるやかな空気が流れ、心地よかったなあと振り返っています。初めて会い、言葉も通じず何かわからないけれど、彼女たちとの距離が近くなったように感じています。

こんなふうに思い返していたらキヤンドルナイトでコーヒーを飲もう!と思いつきました。暗い中、ろっすくの灯りで、あの時の心地よい流れを再現しよう。■



2008年、東北タイではじめて稲作に挑戦したときの写真です。

- 1 — 田起こしを終えた田んぼで育苗します。50センチくらいに育った稲を抜いて束にし、先っぽを切り落とします。先を切り落とすことで、田植えした後の生長が早いとのこと。茎を折らないように丁寧に、しかし、すばやく抜いていかないと日が暮れてしまいます。
- 2 — 刈った稲は地面に寝かせて天日で3日ほど乾燥させ束にします。稲の束を回収し担いで一箇所にまとめていきます。肩にずしりと感じる重みから今年の米の出来がわかるそうです。
- 3 — 脱穀です。竹でできたヌンチャクのような道具で稲の束を挟み、板に叩きつけて脱穀します。
- 4 — 精米を終え、初と米を分けていきます。大きなざるに精米し終わった米を入れて水平方向に振ります。そうすると、初と米が分かれていきます。私が10分経っても一向に分けられないこの作業を、何十年も経験してきた村のおばあちゃんは1分も経たないうちにできています。これぞ身体に染み込んだ技術の極み。

(2008年撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含みます) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

## 編集後記

安全なものを食べるのは、基本的人権である。忘れてはならないのは、自分の人権を実現しようと思ったら、ひとさまの人権を思いやらなければいけないということだと思ふ。安全の前に食えない現実を抱えている人びとが世界に溢れていることを今号では紹介したいと思つた。(大野)

正月休みに『戦場のピアニスト』という映画を見ました。第二次世界大戦中、強制収容所行きを免れたユダヤ人である主人公が命辛々生き延びていく姿を軸にストーリーが展開していきます。多くのシーンで“どうやって食べていくか”ということが丁寧に描かれていました。年明け、パレスチナのパートナーからガザ地区への食料支援の緊急アピールが届き、映画の中で描かれていた、破壊されていく街の情景と、生きることは食ふことという強烈なイメージと重なりました。(吉澤)

以前、フィリピンで一昔前の日本の特撮ヒーローがプリントされた服を着た女の子に会いました。子どもの成長に負けず劣らずヒーローの代替わりも早いもの。きっとあの服も日本の誰かの手によってその子の元に届いたのだと思うけれど、流行り廃りが関係ない異国ならばおさかりとして十分有効。だけと思わぬ再会に鼻息荒くなる私に反して、彼女はそれがヒーローだなんて全く認識もしていなかったわけで…。JFSAの活動記事を読みながらそんなことを思い出しました。(松田)

## ハリナ HALINA

2009年冬号 vol.02-no.03  
2009年2月1日発行

【編集長】  
大野和興

【編集者】  
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】  
長倉徳生

【イラスト】  
保光美由紀

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人APLA  
(APLA/あぶら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。  
[http://www.apla.jp/04/04\\_halina.html](http://www.apla.jp/04/04_halina.html)

事務局の動き(2008年11月～2009年1月)	
10月 25日	APLA評議員・理事会開催 (前号掲載遅れ)
11月 8日～11日	「互恵のためのアジア民衆基金」設立準備大会・「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議に事務局から秋山、大橋、津留、吉澤、その他に共同代表の正田美津子さん、理事の廣瀬康代さんが参加しました。
11月 12、13日	「アジア民衆福岡寄り合い」国際会議・海外参加者の分散交流会(グリーンコープ各単協)にATJと一緒に参加。(海外ゲストに大橋、津留がアテンドしました。)
11月 17日～21日	グリーンコープ共同体“from ネグロス・セミナー”で講演会が行われ、大橋、吉澤が各地を訪問しました。(グリーンコープ生協(長崎)、グリーンコープ生協おおい、グリーンコープ生協くまもと、グリーンコープ生協(鳥根)、グリーンコープ生協みやざき)
11月 26日	ハルシステム・ドゥコープ“DO! 平和募金団体交流会”に吉澤が参加しました。
12月 4日	反貧困ネットワーク・食の危機分科会の打ち合わせに吉澤が参加しました。
12月 9日	東京都新宿区・暮らしを考える会の学習会で吉澤がATJとAPLA/あぶらの活動の話をしてきました。
12月 14日	アース・ビジョン事務局と共催で“食・映像から見るもうひとつのアジア”が東京都新宿御苑で開催されました。共同代表の村井吉敬さん、南伊豆の百姓谷洋一郎さんの対談も行われました。
12月 14日～19日	BM技術協会にネグロス島と北部ルソンでBM技術の指導、調査をしてもらいました。
11月 20日 12月 18日	APLA民衆交易・フェアトレード研究会開催
1月 6日	パレスチナ・ガザ地区緊急救援のお願い「フード・バスケット支援」開始。
1月 9日	白柳誠一枢機卿名誉顧問宅へ、評議員の弘田しずえさん、秋山、吉澤でご挨拶に伺いました。
1月 25日～29日	フィリピン・ネグロス島と北部ルソンの農民交流会が行われ、大橋と吉澤が同行しました。

- 12月にはお歳暮企画『エコシュリンプのギフトセット』を販売し、好評でした。次回夏のお中元の時期に再度販売予定です。

## 事務局からお知らせ

## 09年総会は5月開催予定です。

追って詳細はご連絡しますが、正会員の方はご出席よろしく申し上げます。

## APLAでは会員さんへメーリングマガジンを配信しています。

APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡下さい。info@apla.jp)

## パレスチナ・ガザ地区緊急救援のお願い

ATJのオリーブオイルのパートナー団体であるPARC(パレスチナ農業復興委員会)及びUAWC(パレスチナ農業会務委員会)からガザ地区支援の緊急アピールが届きました。皆様にも既にハガキやメールでご案内をしておりますが、何卒ご支援いただけたら幸いです。

■『フード・バスケット支援』ご支援いただける金額より受け付けます。

※今現在1日1000トンの日用品が必要とされています。  
※フード・バスケット/1セット当り6500円相当です。1セットで7～10人(約1家族)がおよそ2.5日暮らすことができます。  
※PARCでは10万個のフードバスケットの支援を目標にしています。

フード・バスケットの内容		
1. 粉ミルク	5. 豆	9. ろうそく
2. 干しイワシ	6. 牛のモルタテッラ(ソーセージ)	10. おむつ/生理用ナプキン
3. 乾燥豆	7. ビスケット	11. オリーブオイル石鹸
4. フムス(ひよこ豆のペースト)	8. 乾燥ナツメ	12. 胡麻のお菓子

## 【募金受付先】

《郵便振替》00190-3-447725 特定非営利活動法人APLA  
通信欄に、必ず「パレスチナ緊急支援」と明記してください。

《銀行口座》みずほ銀行高田馬場支店 (普通)2650327 特定非営利活動法人APLA  
銀行口座へお振込の場合、下記連絡先へ詳細をご連絡ください(振込名義人、金額、ご連絡先)。

連絡先: APLA/あぶら事務局 tel:03-5273-8160 fax:03-5273-8667 e-mail: info@apla.jp



バナナ村の青年たち。

「危機でもこわくない!」  
2つの農民集会在意味するもの

日本に初めて民衆交易のバナナを送り出したバランゴン生産者協会BGAは今年で結成17年を迎えたが、10月に初めて青年部の総会が開催された。テーマは「地域づくりを担う青年たちの輪をひろげよう」。カンラオン山麓の15部落から集まった40名の青年たちのほとんどは、BGAが支援する高校・大学の奨学生(16歳～22歳)たちだ。彼(女)らが生まれた頃は、軍事化や自然災害で疲弊したバナナ山に自立開発5ヵ年計画が作られBGAが誕生した。

バナナ村の青年たちに続いて12月にはANOFA(ネグロス有機農家連合)の総会が開催された。7つの地域から60名が参加。全員が元砂糖労働者から、農地改革を経て野菜生産を中心にした自営農民に転換した人々だ。テーマは「フード・セキュリティ…地産地消の地域をつくる」。

## From Indonesia【インドネシアより】

## ラピンド熱泥問題の今

2006年5月29日、スラバヤ郊外シドルアルジョの住宅密集地域で突然熱泥が噴出してからもう2年半が過ぎようとしている。熱泥はまだ出



泥に埋まった村。

続けている。小規模の噴出地点も含めるとその数はすでに100ヶ所を超えている。政府は熱泥噴出を止めようとする技術的試みに匙を投げたようだ。先の目処が立たない中、泥溜池の周囲にどんどん土盛りして決壊を防ぐことと、溜まった泥をせつせと地元河川に棄てることを続けている。

この間、泥が流入して人が住める状態でなくなった地域は3郡13ヶ村、面積にして約1500ヘクタール、被災住民の数は7万5000人に及ぶ。そもそも熱泥が噴出した原因はラピンド・ブランドス社

によるガス試掘だった。ラピンド社はインドネシアでも有数の財閥「バクリー」の傘下にある会社で、その筆頭アブリザール・バクリーはユドヨノ政権で公共福祉担当調整相を務めていた。ラピンド社は熱泥被災住民に賠償金の20%を支払ったが、残り80%がまだ支払われていない。住民は現金で残り80%を即支払えと、連日デモや座り込みで訴えている。これに対しラピンド社は昨今の世界的経済危機で会社には賠償金を一括払いする能力がないと言いつつ、ユドヨノ大統領はラピンド社に「早く問題を解決しろ」と怒ったというが、有力財閥を相手に刑事責任の追求も中途半端だ。住民の怒りはすでに制止がきかない危険な状態に達している。去る12月7日も住民と警察の衝突が起きた。被災住民の避難所となっているポロン新市場も「物見遊山の見学お断り」という横断幕が入り口にかかっている。(インドネシア・東ティモール担当デスク・津留麻子) ■

「世界的な危機だど? 怖がっちゃいけない。車やコンピューターがなくても生きていけるが、人はどんな時でも水と食糧がなければ生きていけない。だから農民はこれからの時代、一番重要な存在になるのだ。みんなもつと堆肥をつくらう!」長老格のタタイ・ピセンテは、自慢の替え

歌(コンボーン)で農民たちを激励した。世界経済の不安が押し寄せこの時期に開催された2つの農民集会は、「農業で生きよう、農家なら生き延びられるぞ」という将来の希望を農民自身が示してくれた画期的な一歩になった。(フィリピン担当デスク・大橋成子) ■